

蘇東坡の絵画論

— 中国絵画入門より —

この人物がもつ中国文化史上の影響力は絶大である。こと中国絵画理論だけを問題にするなら、彼がすべてと言ってしまったても過言ではない。さらに言えば、次にあげる詩だけで、中国絵画理論史を語ってしまうことも可能である、というほど、この詩は重要なものだと考えている。蘇東坡の「書鄴陵王主簿所画折枝」を、二首ともにあげておく。

書鄴陵王主簿所画折枝

鄴陵の王主簿の画く所の折枝に書す

其 一 元祐二年（一〇八七年）

- 1 論畫以形似
- 2 見與兒童鄰
- 3 賦詩必此詩
- 4 定非知詩人
- 5 詩畫本一律
- 6 天工與清新
- 7 邊鸞雀寫生
- 8 趙昌花傳神
- 9 何如此兩幅
- 10 疎澹含精勻
- 11 誰言一點紅
- 12 解寄無邊春

画を論ずるに形似を以つてするは

見 兒童と隣りす

詩を賦するに此の詩を必とするは

定めて 詩を知る人に非じ

詩画本と律を一にす

天工と 清新となり

邊鸞の 雀は 生を写し

趙昌の 花は神を伝う

何ぞ如かん 此の兩幅の

疎澹にして 精勻を含むに

誰か言う 一点の紅のみと

解く 無辺の春を寄す



【参考】榛荊鶻鶉圖 邊鸞（傳）部分



【参考】東京国立博物館蔵 竹虫図
趙昌：北宋を代表する花鳥画家

【語釈】○元祐二年（一〇八七）五十二歳の作。○鄆陵 県の名（今河南省に属する）。これは王主簿の出身地であるのか、任地であるのか不明。○王主簿…王は姓。名は不明。主簿は官名で地方の属官である（州にも県にも置かれた）。○折枝…草木の全体でなく、折り取った一枝を画くもの。○形似…画にかいた形がかく対象そのものに似ていること。○見…見識、見解。○賦詩…詩を作ること。ただし特に題を与えられて作ることということがある。○必此時…此とはたぶん題をさす。与えられた題のごくせまい範囲で詩を作るであろう。この句には他の解釈もありうる。○本一律…（詩を作るのも画をかくのも）本来、そのやりかたは一つである。律は規則。一律とは同一の法則あるいは理念に支配されていること。その法則・理念の内容は次の句に示される。○天工…人工に対する語。無技巧の技巧ともいうべきもの。わざとらしい技巧のない真のたくみさ。○清新…にごりけのない、さっぱりした新しさ。○辺鸞…唐代（八世紀末）の画家。京兆（長安の周辺地区）の人。花鳥画の名手であり。官吏としては右衛長史（近衛部隊の事務官）となった。○趙昌…宋の真宗の世（九九八—一〇二二）の画家。漢州（四川省広漢県）の人。花の彩色画に名があり、自から「写生の趙昌」と称した。○何如…ここでは不如と同じく、及ばない義。○両幅…二枚。王主簿がかいた画が二枚あったので、蘇軾は一枚ずつに一首の詩を題したのであろう。○疎澹…澹は淡に同じ。濃厚でないこと。疎はこみいっていないこと。○精勻…精は行きとどいていないこと。勻は平均して。むらがないこと。○解寄…解は……する能力があることを表わす助動詞。寄は託すること。○無辺…無限というのと同じ。

語釈のみ中国詩人選「蘇軾」小川環樹注より抄出

【解釈】絵画を論じるのに形が似ていることを問題にする。そんな見解は子供同然。詩を詠むのに詩題の描写にとらわれるのは決して詩を本当にわかっている人ではない。詩と絵画はもともと同じ原理のもの、天工と清新とがその勘所。辺鸞の雀の絵はいきいきとしたすがたを写し、趙昌の花の絵は花の心をも伝えるが、この王主簿の二幅の絵が、まばらな筆致と淡彩で精妙な趣をもつのはかなわない。誰が言ったのか、ほんの少し紅色がぬってあるだけじゃないかと。はてしなく広がる春を伝えているではないか。

其二

- 1 瘦竹如幽人 瘦竹は幽人の如く
- 2 幽花如處女 幽花は処女の如し
- 3 低昂枝上雀 低昂す 枝上の雀
- 4 搖蕩花間雨 搖蕩す 花間の雨
- 5 雙翎決將起 雙翎決として將に起たんとす
- 6 衆葉紛自舉 衆葉 紛として自ら挙がる
- 7 可憐采花蜂 可憐なり 采花の蜂
- 8 清蜜寄兩股 清蜜 兩股に寄す
- 9 若人富天巧 若き人 天巧に富む
- 10 春色入毫楮 春色 毫楮に入る
- 11 懸知君能詩 懸に知る 君が詩を能くするを
- 12 寄聲求妙語 声を寄す 妙語を求む

読み下し文 国会図書館 国訳漢文大成より抄出

【語釈】○搖蕩：揺れ動く。 ○毫楮：筆と紙。 ○懸：はるかに。 遠く。

この第一首の冒頭、「形が似ているかどうかで絵を論じてはいけない」というところが、あまりにも有名なところである。これまで述べてきたように、中国絵画は形を超えたものを求めるといふ形象無視の歴史と言ってもよい流れをたどってきたのだが、それはここに極まったと言つてよい。

また第二首の最後、「この絵の作者は、こんなすばらしい絵が描けるといふことは、きつと詩も作れるに違いない」といふ発想も、「詩画一如」の考え方をよく表している。蘇東坡には「王維の絵を見てみると、絵の中に詩があり、王維の詩を読むと、詩の中に絵がある」といふ発言があるのもよく知られている。

蘇東坡は安史の乱で壮烈な忠誠心を見せた顔真卿の書を高く評価する。「書は顔真卿に極まった」とまで言っている。確かにごつごつした感じの顔真卿の書は、彼の精神にふさわしいかもしれないが、それは「たまたま」であつて、無骨粗雑な人間が、きわめて繊細な書作品を作るといふことも、当然ありうることである。

しかし、蘇東坡はその「人格の表出」としての書画を高く評価した。そして、文人が描いたから、というだけで評価される、「文人画」が成立していくのである。

やせた竹は幽居する人の如く
 ひっそりと咲く花は処女の如く
 雀がとまって上下する枝
 花間に降る雨に打たれて揺れ動く葉
 つばさをひろげて飛び立てば
 葉は紛然とせりあがる
 花にやってきた蜂の可憐なこと
 清冽なる蜜を兩足につけて
 この画人は天巧に富み
 春の景色が筆と紙にとけこんでいる
 君が詩を能くすることは
 とおくからでもわかる
 この詩を寄せて返詩を待とう

天工と清新

さらに、この詩に現れる「天工（＝天巧）」と「清新」も重要な概念である。

天工とは、「天が世界を生成変化させているその巧みさのようである」ということである。天は「人為」の対語である。蘇東坡はしばしば「天真」という言葉を使うように、天とは人為によってゆがめられていない、いわば「自然（おのずからしかり＝あるがまま）」のことである。つまり、「工＝巧」という、本来「天」とは結びつかない言葉をつなぎ合わせた言葉で、いわば「自然な技巧」という一見矛盾した概念なのだ。実はこの「自然な技巧」という発想は中国文化における技術全体をカバーする理念であるといっても過言ではない。この「自然＝天然」と「人工」の問題は、すでに書の理論において六朝時代に問題にされ、天然と人工という二つの観点をともに評価できる作品が理想とされてきたが、ここで蘇東坡はこの二つの概念を融合して、一つの創作の原理として考えている。

では、自然な「巧」、あるいは自然な技術とは一体何なのか。

そのモデルになるのは、たとえば春には花が咲き秋には木々が色づく、というのが、まさにそれである。それを、人間がやろうというわけである。

中国の芸術家はしばしば「造化と一体になる」という言い方をする。それはまさしくこの気の造形力と一体になって造形をする、ということなのだ。

またこの蘇東坡の詩では、清蜜という言葉も重要である。ここでは「清」は「濁」との対比がイメージされる。澄んだ蜂蜜、ピュアな蜂蜜ということであろうか。「濃密な清」というイメージを我々日本人はもちがたいかもしれないのだが、「清」に対して、すぐに水墨のあっさりした絵画を考えてはいけないということを示してくれる。

「中国絵画入門」岩波新書二〇一四年刊 宇佐美文理より抄出

『余談』蘇軾の弟子の育て方

一一〇一年七月二十八日、蘇東坡は常州で生を終えた。三歳年下の蘇轍は、長文の「墓誌銘」を兄の為に書いている。そのなかに、次のように言う。

平生、交友に篤く、財を軽んじて施しを好む。（略）其の人の於けるや、善を見ては之を称し、及ばざるを恐るるが如し。不善を見ては之を斥け、尽くさざるを恐るるが如し。義を見ては敢えて為すに勇にして、其の害を顧みず。此れを用てし^もば世に苦しむ。

然れども終に以て恨と為さず。

蘇東坡一〇〇選 石川忠久より抄出